「あのヨハネが、生き返ったのだ」
マルコによる福音書 6 章 14－17 節

マルコ福音書 6 章 16 節のヘロデの言葉、「あのヨハネが生き返った」という言葉はマルコ福音書にしか出て来ません。ルカ福音書ではヘロデの扱いは大変短く、しかも単なる悪者としか表現されていません。

しかし、最も古いとされるマルコ福音書だけが特に詳しく、このヘロデの言葉が載っています。それは一体何を意味するのでしょうか。

主イエスはこのヘロデを「キツネ」と呼んでいます。ヘロデの父である政治的な陰謀の独裁者のヘロデ大王の性格を受け継いでいたヘロデの生涯は、まさに主イエスの言うように「キツネ」のように人を騙し、また人に騙された人生でした。

しかし、自分の心の弱さの故に、ヨハネを殺したヘロデが言った 6 章 16 節の「あのヨハネが、生き返ったのだ」という部分は、原語では受け身形で、しかも「あの」ということが大変強調されています。ですから、正確には、ヘロデが言った内容というのは、「自分が首を切ったところのあのヨハネが、神様によって、よみがえさせられたのだ」という意味です。

ところで、私たち、一人一人、このヘロデのような部分を少しだけ、心の中に持ち合わせてはいないでしょうか。

つまり、自分の持っている価値観とのぶつかり合いです。どちらかを選ぶときか悩んだ結果、わたしたちもこのヘロデのように、本来の価値観よりも自分にとって有利な方を重視することを選ぶ場合があるのではないでしょうか。

これを心理学用語では「承認要求」といいます。「承認要求」というのは、他人に承認されたい、つまり、「人から認められたい」という欲求です。ヨハネの神の言葉を喜んで聞いていたヘロデは、「承認欲求」が大変に強く、人々を満足させようと思って、ヨハネを殺しました。しかし、それでは自分自身と結果的には「和解」出来ません。つまり、そこでヘロデは自分の罪の告白をしているのではないでしょうか。ですから「あのヨハネ」なのではないでしょうか。

しかし、主イエスの言葉を聞いても、私たち一人ひとりの中に住む「非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前」という小さなヘロデは、自分の中に本当にいないのでしょうか。そして、私たちは自分自身と本当に「和解」出来ているのでしょうか。

このヘロデはイエス・キリストとほぼ、同じ時代に生きていながら、全く正反対の生き方をした人物です。しかし、そのような人物が、たとえ戸惑いながらの声であっても、罪を告白し、「神の栄光」を讃えたということは何を意味するのでしょうか。

そこは、和解と平和の主イエス・キリストの力の支配する領域であるということではないでしょうか。それはたとえ、戸惑いながらの声であっても、主イエス・キリストの御名が力をふるう場所となる予告であるということではないでしょうか。ですから、私たちは、「あの主イエスが、生き返ったのだ」という信仰をいつもでも、共に持ち続けたいと思います。